



### 社会人博士課程の必要性

十数年前に比べ、国内での博士の学位取得者の数は激減しているというニュースを最近よく見聞きします。ただ、博士の学位を取得することが必ずしも日本の科学技術の発展に直接的に関係しているかどうかは分かりません。くわえて、マスコミの視点では、近未来の食糧問題を解決するグリーンイノベーションやAI、そして宇宙開発など、人材育成よりもテクノロジーを重要視傾向にあるようです。しかしながら、学位取得者数の減少は日本の基礎科学の発展を徐々に停滞させてしまう可能性があります。

確かに、博士の学位を取得することは並大抵のことではありません。私が学生の頃も、学部から博士まで、同じ研究室に在籍していてもオーバードクターの方が多くいました。その理由はさまざまですが、このような状況は現在でも同じであるように感じます。また、博士の学位を取得することで就職先が狭められるという噂も飛び交って、モラトリアムの継続を望む学生を除くと、ほとんどの学生はこのことに関して真剣に悩みます。

ここまで博士の学位取得の現状に関して消極的なことを書きましたが、本当のところ、私はそうは思っておりません。かえって学生の個々の考えを尊重し、将来を選択できる時代になったのではないかと考えています。学生は学部や修士課程を修了するまで、実社会における「研究」という仕事を直接的に知りません。一度就職して社会経験を積む中で仕事としての「研究をする」という意味を知るのだと思います。そして、もしその際に学位取得の重要性を認識したならば、課程博士（大学院に進学する博士課程）または社会人博士課程（会社などに属しながらの博士課程）に入学すればいいの

だと思います。実際、このことは文科省からも推奨される事項のひとつとして挙げられています。私個人的にも、そのような学生は徐々に増えているように感じます。また、そのような学生ほどやる気に満ち、目標もしっかりしているように思います。

とは言え、やみくもに社会人博士課程を増やしても中途退学者や転職浪人が増えることも指摘されています。また、社会人博士課程の進学は職場の環境にも依存するため、限られた状況が構築された上で入学が可能になるのも事実です。そのため、私は修士の学生が修士課程までに論文を投稿し受理されることの重要性を考えています。学生時代に論文をもつのは難しいことですが、それぞれの研究室の主宰者、内部教員やメンバーが手助けをすることで可能になると考えます。博士の学位認定は大学院ごとに異なっていますが、修士と博士で課題が継続的または類似しているのならば、学位論文として認識されることもあるでしょう。また、そのように学内の内規または法規を変えることも必要ではないかと思っています。

修士までの内容で論文を出せば、その内容が希薄になってしまう。そのような指摘も多くあります。私もそう思います。しかし、学生側に立ってみると、それは研究への達成感やさらなる興味及び継続の意志をもたせ、社会人博士課程入学への可能性を上げることを意味すると考えます。また、社会人博士の話とは異なりますが、筆頭または名前が入っている原著論文をもっていることは内資系の会社に一度就職した後に外資系の会社に就職するときにも強い味方になると聞き及んでいます。

あらゆる情報（一人称による博士取得後進路の口コミなどを含む）が即座に手に入る社会、各々で研ぎ澄まされた選択をすることが可能になってきています。選択するのは学生たちばかりではなく、私たちもそうです。時代に即した博士課程を構築することは、長い目で見た基礎研究の質を保証することでしょう。そのために努力をしていきたいと思っています。

(JY)